生物の代謝過程から見る人間労働の生産性

劉　　小　　健

（受付　2001年5月10日）

目　　次

はじめに
1.　生物物質代謝過程から見るマルクスの労働本質論
2.　資本主義社会における人間労働本質の変質
3.　マルクスの社会主義理論と実践の検証
4.　労働生産性の発揮に適合する経済形態は何か
結　　び
参考文献

はじめに

人間の労働生産性を高めようとする願いは世界中に共通の願望であり，近代現代にいたるまで多くの人々によって議論されている。もともとマルクスは当時の資本主義の深刻な社会矛盾から資本主義の本質を研究し，資本主義から社会主義へ変革することにより，より一層人間の労働生産性を高めることができると論じていた。しかし，『資本論』の第一部が刊行された1867年から今日にいたるまで，130年余の間に，世界中の様々な国により，社会主義が実践された結果，計画経済は行き詰まって，資本主義の市場経済に比べ，人間の労働生産性は当時のマルクスの予想通りに行かなかったのが現実である。とは言え，資本主義市場経済と言えども，弊害なしで，人間の労働生産性を最大限に発揮できるとはいえない。なぜなら，そもそも資本主義の理念及び実践において，人間の労働生産性の発揮を阻害する要因をそのメカニズムにおいて持っていたからである。

そこで，本稿では130年余前にマルクスはどのように資本主義の弊害を指摘したのか，その資本主義の矛盾から脱却して，社会主義への転換を主張したが，それはどのような根拠に基づいていたのか，そして，その社会主義の理念はなぜ現実に実現されなかったのかについて論じ，そしてどのような経済社会で，人間の労働生産性を最大限に発揮できるのかについて論議したいと思う。

1.　生物物質代謝過程から見るマルクスの労働本質論

人間の労働生産性を追求するにあたって，まず人間労働の本質は何か，そして自然に対して人間の物質代謝過程とほかの生物の物質代謝過程の区別は何かについて，究明しなければならない。

まず，マルクスは実際に人間の労働についてどのように考えたかについて見よう。マルクスの『資本論』[1] では人間の労働についてこう述べて，「労働はまず，第一に，人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち，人間がその自然との物質代謝を，彼自身の行為によって媒介し，規制し，調整する過程である。人間は，自然素材そのものにたいして，一つの自然力として相対する。彼は，自然素材を，彼自身の生活のために使用しうる形態において獲得するために，彼の身体のもっている自然力，すなわち腕や脚，頭や手を動かす。この運動により，彼の外にある自然に働きかけ，これを変化させるとともに，同時に彼は彼自身の自然を変化させる」[2]。

人間の社会労働は実に生物の物質代謝の過程に含まれると思う。人間の労働は労働者の持っている天然の自然力で概ね工場，或いは畑で物作ったり，栽培したりして人間の生存を維持するために働いている。特に人間の生存のために使用価値を作ることはどんな社会形態においても，その労働の本質は同じである。そして人間は社会の労働を通じて，その労働の経験を重ねながら，自分の労働の能力を絶えず熟練させていくのである。した

1)　マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗　訳。
2)　マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗　訳，231ページ。

がって，人間は自然に働きかけて物を作ると同時に自身の発展と創造を実現していくのである。

人間はこのように，自身の労働で使用価値を創造しながら，自然との物質代謝を行っている。即ち人間のこのような性質の労働は人間の歴史に貫通して行なわれることである。

さて，人間の物質代謝過程に比べて，他の生物の物質代謝過程はどのように行われているのだろうか。実に人間以外の生物も，自然環境の中で，自然法則に従いながら生きているのである。『物質代謝とその調節Ⅰ』[3] において，生物の基本性格について次のように述べている。「生物の基本的性格の1つは，変転きわまりない環境のさ中にあって，自己の独立性とそれに個有の構造を維持し，さらに自己を発展させるために成長と増殖とを行うことである。そのために生物は絶えず外界と物質を交換し，またエネルギーを消費しているが，これを可能としているのは生体内で瞬時の休みもなく営まれている物質代謝である」[4]。ここで特に注目されるのは，ほかの生物も人間と同じように自己の独立性と個有の構造を維持し，自己の生存と発展を維持するために，絶えず自然界と物質を交換しながらエネルギーを消費し，生存発展を実現したのである。ほかの生物及び人間で，自然とのこのような物質代謝の過程は，生物の自然界への働きの本質であり，また人間の労働の本質である。

またはほかの生物の働き，及び人間の労働は自然界の法則に従わなければならない，この自然の法則は自然界の中に有機的に統一されている。「生物が生きてゆくためには絶えずエネルギーを消費しなければならないが，すべての生物はその活動のためのエネルギーの源泉を究極的には太陽に仰いでいる。すなわち，自養性生物（autotroph）に属する緑色植物と光合成細菌は太陽光線のエネルギーを用いて CO_2，H_2O，NH_3 などの簡単な無機

3) 佐藤了，西塚泰美　編『物質代謝とその調節Ⅰ』岩波書店　1975年。
4) 佐藤了，西塚泰美　編『物質代謝とその調節Ⅰ』岩波書店　1975年，1ページ。

化合物からエネルギーに富んだ有機栄養物質を合成する能力（光合成能）を備えている。これに対して，動物と大多数の微生物は他養性生物（heterotroph）と呼ばれ，光合成能力を欠いているので，植物が光合成によって作り出した栄養物質をとりこみ，それに依存して生活している」[5)]。ここから生物の基本法則が見えてくるわけである。つまり，太陽はほとんどの生物のエネルギーの源であり，植物及び動物は直接的に或いは間接的に太陽のエネルギーを摂取し，生物の種類ごとにそれぞれの役割を果たしながら互いに有機的な統一体の中で生存発展しているのである。したがって人間の労働も生物のこのような物質代謝の中の一環として存在しているので，生物のこのような有機的な統一体内の法則を守らなければならない。人間の歴史の上で，このような自然的な法則を無視し，人為的無作法な行為によってもたらした自然破壊，人間の生存環境の悪化，特に経済発展の停滞などの問題がよく現われている。

生物はこのような自然法則の利用をするには生物体内の器官を持って道具として使われていた。例えば植物の場合，光合成するために葉緑体などの器官（道具）があり，これらの器官をもって空気中の炭酸ガスと地下の水を原料にして，太陽のエネルギーを吸収しながら澱粉を合成する。動物の場合，わずかな例外を除き，足，口などのような移動可能な複雑な器官を身体に持っていて，自然への働きにもある程度の目的意識も現われてくるが，その働きの範囲はやはり身体の中の器官（道具）で限定されているので，その行動も限定されたワクの中でしか働けないのである。

したがって，動物の物質代謝過程が自然の中で存在するものしか採取できないし，この限定され身体の器官だけが頼りになるので自然への働きに対して目的を立てるという意識的な行動にもなってこない。この意味で動物の働きは動物の本能で営んでいるである。

人間の場合，手足などのような器官（道具）はもちろん人間の体内に存

5)　佐藤了，西塚泰美 編『物質代謝とその調節Ｉ』岩波書店　1975年，２ページ。

在するが，ほかの生物と同様に本能で働ける以上，人間の体に所持しない特殊な道具を作ることができる。これは他の動物と根本的な違いである。そこで，人間という特殊な動物の物質代謝過程において，人間の自然に対する働きは特別な性質を持っている。この特別な性質について，マルクスは，次のように考えている：

第一に，道具の多様性・複雑性が挙げられる。「彼は自然的なものの形態変化のみをひき起こすのではない。彼は自然的なもののうちに，同時に，彼の目的を実現するのである。彼が知っており，法則として彼の行動の仕方を規定し，彼がその意志を従属させねばならない目的を，実現するのである。そして，この従属は，決して孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のほかに，目的に向かって進む意志が，注意力として現われ，労働の全継続期間にわたって必要とされる」[6)]。ここでは，マルクスの指摘されたように，人間の働きは，自然の形態変化のみに頼って行動するのではなく，人間の自らの目的に沿って働いたのである。したがって，自然界への人間の働きかけの多様性に対応して，人間の作った道具もますます多様になっていく。人間はこのような道具を作って，そして彼らの道具である身体の諸器官によって動かしながら生産活動を行っている。更にマルクスは人間のこのような働きに対して労働者の知っている自然法則で規定し，そして労働者の意志を従属させなければならないと主張している。

つまり，労働者の労働意志を決定する際に，自分はどんな道具をもっているか，自分の身体はどこまで自由に動けるかについて測定しながら労働目的を立てねばならない。人間労働の目的が自然の法則に従属するのみ実現されるのである。したがって，人間は自然にあるものを単に受動的に採取するのではなく，自然の再生性を常に配慮しながら，多面的に生産活動を行っているのである。このような人間の意識的な労働は未開の人間社会までに遡ることができると考えられている。

6) マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗 訳，232ページ。

第二に，人間の自然に対する働きの範囲は，人間の利用できる器官（道具），または人間の作った道具の利用可能性によって決まっているので，違った道具を持っている人間がそれぞれ，別々の働き方式を取っている。つまり人間のそれぞれの能力に応じて社会の労働分業体系が形成されるのである。この点についてマルクスは「労働手段は，人間労働力の発達の測度器であるのみでなく，そのうちで労働が行なわれる社会的諸関係の表示器でもある」[7] と述べている。つまりある社会の労働手段の体系を知ることによって，その社会の形態を把握することができるということである。

だが，人間以外にも動物の物質代謝過程においてある種の分業体系が見られる。例えばマルクスの挙げた例である蜜蜂[8] の「王国」で，働き蜂と女王蜂のそれぞれの役割がはっきりと分かれていて，これは蜂の身体の組織器官の違いによって自然的に形成されている「分業体系」に他ならない。しかし，人間同士の違いは，大体男性と女性，大人と子供などについて指摘されるが，これらの違いによって人間の分業体系を形成するのは考えにくい[9]。人間は高度に発達した知能的な動物としてその分業体系も人間の能力（肉体的熟練程度・頭脳的などの要素を含めて）によって決まっているのである。特に人間の生まれつきの天然素質と人間それぞれの受けた教育水準によって，人間の労働能力は大きく違ってくる。人間のこのようなそれぞれの持っている特殊性に対応して，人間の労働分業における無視できない要因となっている。

第三に，人間が労働している内に，その労働成果の使用価値は常に労働手段に転化し，自然に対して人間の物質代謝の能力は絶えず発達していくのである。マルクスは人間の創造した使用価値と労働手段の関係についてこのように述べている。「ある使用価値が生産物として労働過程から出てく

7)　マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗 訳，234ページ。
8)　マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗 訳，232ページ。
9)　一部の特殊な事情を除く，例えば，男女の体格の違いで，重労働は男性に適していることなど。

ると，以前の労働過程の生産物たる他の使用価値は，生産手段としてそれに入りこむ。この労働の生産物なる同じ使用価値が，かの労働の生産手段をなす。ゆえに，生産物は労働過程の結果であるのみでなく，同時にその条件でもある」[10)]。

ここで，人間の労働道具は人間の身体の中の器官のみならず，人間の作った道具も含まれるので，常に人間の労働道具はその身体の外に存在する。したがって，人間の労働生産物も人間の身体の外に出来上がるわけである。つまり，人間の労働と消費の過程は完全に分かれていて，今日の労働は明日への消費のために行うこともできて，人間の創造した使用価値の一部が常に次の労働過程における労働手段の補充にも回されるのである。

人間はこのようにまず労働を通じて，生産物の使用価値を作り上げ，それからそれを消費するという物質代謝の過程を行っているのである。そして人間の労働が繰り返されたため，労働の生産物が増加し，これにあいまって，人間の労働手段も絶えず充実されて発達していくのである。その結果，人間の獲得した労働成果の内に，大自然の原始的に提供したものはだんだんその存在の意味が薄れていて，人間の労働の生産物はそれの代わりとして人間の生存維持の頼りになっている。こうして，人間と自然との関係は直接的から，間接的に迂回する形を呈していて，大自然も人間のこのような物質代謝活動により，より深くその可能性を生かされて循環されていくのである。

以上述べたように，人間の物質代謝過程と他の生物との物質代謝との根本的な違いは，生産過程と消費過程が分かれているかどうかに決まっている。他の生物は直接に自然に働きかけて，外界にあるものを摂取するのに対して，人間は間接的迂回的な形で自然にあるものを単に採取するのではなく，大地の可能性を十分に発揮できるように自然とかかわりながら生きているのである。

---

10) マルクス『資本論』第一巻，岩波書店 1967年，向坂逸朗 訳，236ページ。

2.　資本主義社会における人間労働本質の変質

前述したように生物の物質代謝過程と人間の物質代謝過程の共通点において，生物（各種の動植物，及び人間を含む）は自らの生存のため，自然の法則にしたがって働きかけているのである。人間でいえば，人間の労働過程は使用価値を作る過程である。

ここで，生物の働き及び人間の労働はいずれも自らの行動であり，特に人間の労働過程において人間は自然に対して目的を立てる。この人間の特有の特徴は他の生物と区別する主なポイントとなっている。人間は立てた目的に応じて自然法則に従いながら，神経とか，筋肉を緊張させなら，ものを作り上げているのである。こういった人間の労働は，前述のようにあらゆる社会体制に共通することである。

まず，ここで，目的定立という人間の特有の特徴に注目される。「われわれは，労働がもっぱら人間にのみ属するばあいの形態における労働を想定する。蜘蛛は織匠のそれに似た作業をなし，蜜蜂はその蝋房の構造によって，多くの人間の建築師を顔色なからしめる。しかし，最悪の建築師でも，もとより最良の蜜蜂にまさるわけは，建築師が蜜房を蝋で築く前に，すでに頭の中にそれを築いているということである。労働過程の終わりには，その初めにすでに労働者の表象としてあり，したがって，すでに観念的には存在していた結果が，出てくるのである」[11)]。ここで，マルクスは下手な大工より蜘蛛，蜜蜂の方がよっぽど上手に家を建てると言われるが，しかし一番下手な大工でも蜘蛛，蜜蜂に勝るのは，最初に頭の中で家の構図を想定し，その家の構図によって実際の家を建てるという点にある。つまり，目的定立は人間労働の特有の特徴である。このような強い自らの意志によって，目的定立を，実際の生産に先行するのである。そこに人間の労働の本質が再び見えて来るわけである。この点はだんだん重要な意味を持

11)　マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗 訳，232ページ。

つようになると思う。つまり人間労働の意欲はどこからきたのか，さらに人間の労働生産性を高めようとするには，どのようにしたらいいのか，その答えはすでに明らかになっている。すなわち人間の本来の意欲に沿った労働は，その労働の効率性が高いということである。

マルクスは，このような人間と自然との物質代謝過程という点に視点を据えて人間の独自性を考察した上で，歴史を作る動物としての人間は，労働生産性を高め，より豊かな人間社会を実現するには，労働者自身の解放（資本主義社会の搾取から）を訴え，資本主義から社会主義への転換を主張したのである。

マルクスは更に人間のもともとの労働目的（使用価値の生産）により生産活動を行うには，労働者の独立した人格，自らの意志決定の自由は欠けてはならないと主張する。初期のマルクスはこの自由への願望を実現するために行動したのである。そして，『資本論』の序言のなかで，特に労働者の自らの決断力，勇気と英知は労働者の持つもっともかけがえのない基礎的要素であり，労働者にとって最低の条件として位置付けている。労働者はどこまで自由に目的を定立できるか，どこまで立てた目的が実現できるか，要するにどこまで，自由な主体として自由に自然と人間にかかわりあえるかという問題について，労働者の生産性をより多く発揮する決め手になるのである。

しかし，資本主義社会になると，労働者の天然所有する生産手段と労働力は，個別資本家の貨幣の力で自由に売買され，もともと人間の労働の本質（使用価値を創造する）も変質するようになったのである。人間の労働成果は商品という形に変貌し，もともと使用価値を生産する人間労働の過程のなかで存在しない資本も登場したのである。そこで，財産の所有者による何らかの形での搾取が行なわれる。そして，この搾取の過程は表面的に見ればやはり人間の労働の形で行なわれている。例えば，工場でものを作るとか，畑で農作業をするとか。しかし，ここで人間が作り上げた成果が財産の所有者にとられて，労働者と財産の所有者は対立の関係にあるの

である。この意味から言えば，このような労働過程は何らかの搾取過程に違いない。そこで，あらゆる私有財産制度のもとでもともと使用価値を生産する人間の労働は，人間の搾取行為と同時に発生したのである。

資本主義社会という独自な社会形態では，労働という使用価値を作る過程が—財産所有者による搾取の物的土台になっている。つまり，物を作るのが目的ではなくて，物を作ることによって価値の増殖を実現する。個々の資本家の価値増殖の具体的な措置は，常に利潤をあげるということである。

『資本論』の第一部はこの搾取過程について詳しく論述している。つまり，資本主義という私有財産制度の下では，人間労働の成果が商品という形になり，資本家のもつ貨幣で労働力商品と他の労働手段を購入し，労働者の生産活動によって資本家は貨幣価値の増殖を実現するということである。マルクスはこれをG—G`（貨幣Gが増大した貨幣G`になる）という形で表現している。こうして搾取を目的にした剰余価値の生産は資本主義社会の基本形態となり，使用価値の生産という人間の本来の労働目的が資本主義社会において失われているのである。

更にマルクスは資本主義における資本家の搾取方式は「絶対的剰余価値の生産」[12] と「相対的剰余価値の生産」に概括されている。資本論は「絶対的剰余価値の生産」と「相対的剰余価値の生産」に関して深く論述しているが，ここではその概要をまとめておく。まず労働者はもともと自分の所有する労働力を資本家に売却し，労働者の生存を維持するために，資本家の意思決定によって働くしかない，労働者の創造した価値の内，「労働力価値」と「剰余価値」が含まれている。労働者の衣食住などの基本生存条件を維持するため，言い換えれば生産の再循環を可能にするため，労働者が資本家から得た部分の貨幣価値は「労働力価値」といい，労働者創造した総価値から資本家の投下した資本を（労働力価値，原料，労働手段など

12）マルクス『資本論』第一巻，岩波書店　1967年，向坂逸朗 訳，231ページ。

の合計）引いた部分の価値は「剰余価値」という。そして資本家の投下した資本の中に，労働手段を購買する部分の資本は「不変資本」といい，労働力価値を購買する部分の価値は「可変資本」と名づけられている。

資本家は「労働力資本」を購買するのは，常に労働者が創造した価値は，自分の投下した価値より大きいからである。即ち，資本家の「剰余価値」への追求は資本主義社会の発展の原動力になったのである。

そして資本家の「剰余価値」を追求するため，「労働力価値」を一定の条件で，単純に労働時間を延長することによって，獲得した「剰余価値」の創造は「絶対的剰余価値の生産」といい，或いは，生産技術の更新などにより，労働時間は不変で，「労働力価値」に比べ，相対的に増加した価値は「相対的剰余価値の生産」というのである。単純に労働者の労働時間を延長するには限度があることに対して，科学技術の躍進などの要因により「絶対的剰余価値」の創造は無限であり，現代資本主義において，資本家の主要的な搾取方式になったのである。

こうして，資本主義社会において労働者の勤労，或いは労働生産技術の進歩は，常に資本家の労働者からより多くの搾取を実現することを意味する。労働者達は，本来の労働の本質である自己の意思決定の権利を失い，自己の勤労により得た労働力価値も再生産の循環のために生存維持費として使い果たして，結局労働者たちに残されたのは，生涯をかけて，資本家の「剰余価値」を創造する道具になるしかない。このような状況で，労働の本質である使用価値の生産に明らかに相違し，このような社会体制のもとで労働者の生産意欲を十分に発揮できるのは考えられないことである。

さて，人間の勤労意欲の源泉はどこにあるのか，更に深く探りたいと思う。通常で言えば，労働者にとって，生きる楽しみはしばしば労働以外のことを指す。その労働以外の人間らしい生活はいろいろあると思われるが，大体文化的な生活とか，何かの娯楽とかということであろう。言い換えれば人間の労働に対して，人間の消費活動だけが人間らしい生活なのか，なぜ，人間の労働を人間らしい生活と思わないのか。

この問題に答えるために，いくつかの例を参照する。たとえば音楽家，芸術家，画家など，或いは，キュリー夫人のような科学者にとって生活とは何かで言えば，アトリエに入ったところから，あるいは実験室に入ったところから，彼の，あるいは彼女の本来の生活（或いは生産）というのは始まってくる。その生活のレベルもどれだけの芸術品，或いは科学成果があったかによってはかられるはずである[13)]。

この場合，彼らはちょっとの時間があっても，ちょっとの資金があっても，自分の生産活動（生活活動）の中に投入するであろう。したがって，少なくとも生産と消費は対立的な関係ばかりではなく，特定な場合，特定な社会形態において，対立或いは融和の関係にあるはずである。こうして，消費過程だけが生活の過程であるという判断は不十分なことが明らかになったのである。ここで，一方では生活のために働く，他方では，働くこと自体が心の快楽になるという違いが出てくるのである。もちろん労働者のそれぞれの能力，及びそれぞれ従事する労働の種類によって結果が違ってくるが，それが問題の中心ではなくて，社会体制の問題が主な原因ではないかということである。

実に普通の労働者は常に労働ということに対して，嫌悪するわけではない。例えば，子供の場合[14)]，世の中のことに慣れていないせいか，その幼稚な天真爛漫な顔から人間の本能を観察することができる。子供達は，朝から晩までとにかく何かを楽しんでいる。外の遊戯をするとか，あるいは昆虫とりに行くとかという様子を良く見かける。子供の目で見れば，このような遊戯はやはり何らかの働きとして夢中にやっている。これらの活動は子供にとって好きなことだから，少々風邪をひいていて，熱中にその行動に集中するであろう。

---

13)　本段落は内田義彦著『資本論の世界』（岩波新書，1966年）の104ページを参照してまとめた。

14)　ここの子供の場合は内田義彦著『資本論の世界』（岩波新書発行，1966年）の106ページを参照してまとめた。

つまり，子供の昆虫とりのような働きは子供の自らの意思決定であり，これらの楽しい行動を通じて，子供の自分自身がより健康的に成長していくはずである。だからこそ，子供のこのような労働は楽しい。ところで，いくら昆虫とりの好きな子供でも，嫌いになる場合がある，それは子供の自らの意志決定から離れて，昆虫とりを命令する場合で，いかに子供を嫌がらせることが想像できるだろう。

この例で，まさにマルクスの示唆した労働の本質の姿を描いたのである。他人から命令に従って昆虫とりの場合，子供の自らの願望と相違するので，子供たちには必ず抵抗が起こり，嫌がるばかりだと考えられる。このように子供の意志決定から反して，大人の立てた目的の定立を強制的に子供に受け入れさせた結果，子供にとって，精神的或いは肉体的な苦痛となり，同じ昆虫とりの働きでも嫌いになってしまうのである。

われわれの今日の階級社会では，遊戯ではなくて，労働というものが行なわれている。ここで労働者達は生産したものは他人のものになり，他人の立てた目的のために他人の意志に従属して労働するのである。だからこそ，少数の芸術家と科学者などを除けば，多数の労働者達は労働を嫌う性質をもっていて，彼らの生産と消費は常に対立的な関係にあるわけである。しかも，このような関係自体，私有財産の発生とともに古いのだから，人間は本来労働を嫌う性質が見えるようになったのである。

そういう見方に対して，マルクスは，労働それ自体が人間にとって本来の生き方であり，人間が労働に頼って生存し，労働することこそ人間自身を創造，発展したのであると主張している。資本（賃金労働関係）のもとでは—人間の労働本質が変質したのである。このように，マルクスは人間が労働を嫌いになるのは自然の要因ではなくて，社会体制に問題があると考えたのである。

3. マルクスの社会主義理論と実践の検証

第一節と第二節において，生物の物質代謝過程と人間の物質代謝過程を

考察した上で，人間労働の本質を見てきたのである。つまりもともと人間の労働は自らの意思決定により，人間の自らの生存を維持するために自然に働きかけたのである。言い換えれば，人間の使用価値のために労働するのである。このように労働者自らの意思決定のもとで労働するのは，労働者の労働意欲が最も高く，労働の生産性も高いと思われる。しかし，階級社会になると，労働力は商品に転換し，労働の本質も変質したことは上述した通りである。そこで，マルクスは，資本主義から社会主義へ変遷することより，人間労働の本質が回帰することができて，より高い労働生産性を実現することができると判断したのである。

さて，マルクスの描いた社会主義はどんなものであろうか，言い換えれば，その社会主義はどんな優越性があるのか，これを説明するのにかなりの分量を必要とするが，ここでは，その主なポイントを述べておく。

まず，資本主義社会は労働手段の私有制であるの対し，社会主義社会は労働手段の公有制を実施している。資本主義において，資本家は生産資料，労働力及び生産の成果を占有し，労働者は資本家の搾取の対象となり，社会的地位も低く，労働者自らの生存のため，自分の労働力を資本家に売却するしかない。社会主義社会の場合，全体の労働者は全社会の労働手段，労働成果を共同的に所有するため，労働者は労働手段の所有者，或いは社会の主人となり，労働者は精神的にも解放され，まさに資本家階級の世界から労働者階級の世界へ転換したのである。そして，資本主義においては，労働者は資本家によって購買された労働力商品であり，その生産の目的も資本家のより多くの「剰余価値」を獲得するためである。社会主義社会においては，労働者自ら労働手段を所有するため，その生産の目的も，社会の成員の物質的欲望を最大限にみたすためにおこなわれる。この点はまさに前述の労働の本質に一致している。つまり，社会主義において，労働者達の生産は使用価値のための労働である。したがって，社会主義社会では，人間の労働の本質に回帰したことを意味する。

そのほか，社会主義社会のように全体の労働者を代表する国家は，計画

的に社会の有限資源をもっとも有効的に配分することも期待される。この点にたいして，資本主義社会における資本家は「剰余価値」を追求するため，利潤の高いものに集中し，それによって，経済危機を起こし，過剰生産による社会資源の浪費が避けられないである。つまり資本主義社会におけるような無政府的，非組織的な生産ではなく，計画的，組織的な生産がおこなわれる。社会主義社会はこのような浪費が避けることができると思われている。

以上はマルクスの描いた社会主義社会の基本様相だと思われるが，これはあくまで，理論的な問題で，実際の社会主義の実践はどうであろうか，次に社会主義実践の実態を検証したいと思う。

19世紀初期，産業革命による資本主義制度の確立に伴い，マルクス思想を中心とした社会主義思想が誕生した。その後，資本主義経済制度と社会主義経済制度をめぐる論争はあと絶たない。特に，第二次世界大戦後，「冷戦」と呼ばれる資本主義体制と社会主義体制の両陣営の対峙はもっとも激しくなり，その結果，20世紀90年代初期，ソビエトの崩壊に続いて，生き残った社会主義の国々は「改革」を実施し，その中で中国は目覚ましい経済発展の成果を遂げていた。

社会主義という構想は偶然ではなく，19世紀初期，資本主義の基本矛盾が激化し，資本家階級が富の累積による贅沢な生活をしていた反面，おびただしい大衆の貧困や無知などの現実が続いていた。こうしてフランスのフーリエ，サン・シモン，イギリスのオーエンなどの空想的な社会主義者は，初めて空想的な社会主義の構図を描いた。空想的な社会主義者は，大衆の貧困の根源は資本主義経済制度にあると指摘し，それを社会主義制度に転換することを主張した。

1848年にマルクスは，イギリスの古典経済学，フランスの空想的社会主義，そしてドイツ観念論哲学を源泉として，新しい社会主義の思想である「科学的社会主義」をとなえた。

マルクスはその空想社会主義に対して，その社会主義の基本思想を継承

した上で，その空想性を批判し，次の2点を説明したのである。第一に，社会主義は超歴史的な人間理性の産物としてではなくて，人間社会の歴史発展における必然的な産物であることを強調したのである。第二に資本主義の歴史的発展過程が，その過程の内部に社会主義を実現するための物質的前提条件，特にその真の創造者となりうる社会的勢力を生み出し，成長させ，資本主義の社会主義への変革的移行を不可避にすることを主張したのである。このように，マルクスはこの二点について，それぞれ歴史の唯物論と経済学の原理を用いて，社会主義思想を空想から科学へと転化させたのである。

社会主義理論の実践を行ったの，は旧ソビエト，中国，旧東欧社会主義圏の諸国である。資本主義の市場経済に対して，これらの社会主義の経済構造は計画経済である。旧ソビエトをはじめとする社会主義諸国は，ある時期に，ある程度，経済規模を拡大化したが，その構造の非効率性も顕在化し続いた。

70年の社会主義運動史を持つ旧ソ連の例を見よう。実に旧ソ連の経済はマルクスの考えた社会主義経済とはほど遠い。経済の理論だけで旧ソ連経済を分析するのは不十分である。旧ソ連経済はまさに計画経済であり，計画は政治的意図を持つ故に経済の理論だけでは説明できない側面を持っている。だからといって，政治だけで一国の経済を動かせるものではない。そこには経済の理論が動く側面があるからである。その政治と経済との絡み合いにこそ，旧ソ連の計画経済の本質である。このことは旧ソ連経済工業化の歴史の中に現れてきたし，旧ソ連が試みていた世界戦略の基礎にもなっている。

この旧ソ連の計画経済の構造で言えば，次の4つのモデル[15]に分類できる。まず，官僚的「中央集権型社会主義」モデルでは，計画当局がそれぞれの企業に対して命令を与えていくというやり方をするのが共通の特徴で

15)　旧ソ連計画経済の構造の四つのモデルについては，加藤寛著『現代ソ連経済の構造』（日本経済新聞社1983年）の11ページを参照して，まとめた。

ある。この集権型の経済形態の特徴は戦時中のナチスの計画統制経済とは類似的な印象である。ただ，その場合は，所有の形態が資本主義の所有であったために社会主義的計画経済ではない。しかし，やり方はほぼ同じである。

次に「市場型社会主義」モデルは，補完的市場の役割を利用する経済形態であり，これは市場的社会主義とも呼ばれる。この場合，計画当局が存在し，生産手段もこの計画当局が握っている。これにより企業に対しては命令が与えられるのである。ここまでは集権型モデルとほぼ同じである。しかし，企業側生産を行う時にどのような生産要素を利用するかということに関しては，企業が自主的に決定を実行できるように生産要素市場が与えられている。生産要素の配分には計画当局は間接的に介入するだけで，その量，価格に関する決定は生産要素市場によって決められる。そして，生産された物に対しては消費財市場が認められている。生産要素市場によって企業は資材を調達し，その調達費が企業にとってはコストとなる。企業はこのコストによって価格を決め，生産物市場に生産物を提供する。そして市場の動きによって供給の計画が決定される仕組みになっている。

第三に，「分権型社会主義」モデルである。このモデルでは，計画当局が公定価格と生産目標を決定する。企業はその公定価格と目標に従って生産を行うのである。

最後に，「計量計画型社会主義」モデルである。これは計量の方法によって計画経済を行う方法である。しかしこのモデルは理論上の経済形態であり，どの国でも実施されたことはなかった。

四番目のモデルを除けば，それ以外の３つのモデルについて，旧ソビエトではすべて試みられたが，そのいずれの実践についても成功の例が見当たらなかった。

旧ソ連は過去10数年に及ぶ一貫した軍事力増強努力の結果，かつては圧倒的優位を誇った米国の核戦力に，量的のみならず，質的にも急速に追いついていた。しかし，他方旧ソ連は一貫として深刻な経済困難に直面して

いた。旧ソ連の公式統計[16]によれば，1950年代に2桁台の年平均成長率を達成していた旧ソ連の経済は，1971～1975年の5.7%，1976～1980年の3.7%の年平均成長率へと低下していた。巨額の投資が行われてきた農業生産も不振で，西側から年々増大する穀物輸入を余儀なくされて，そのため支払うのを余儀なくされる貴重な外貨の額も1981年に120億ドル以上に達していたと推定されている。エネルギーの供給も，1970年代前半には年平均6%台の石油増産が可能であったが，エネルギー投資は優先されていたにもかかわらず，1970年代後半から80年代前半における炭化水素（石油と天然ガスの合計）の年平均増産率は3%台へと低下した。この時期，旧ソ連の外貨獲得能力は大幅に低下し，プラントや穀物の輸入にも支障をもたらし，さらに石油の国内需給もタイトになるという事態に直面した。

こうした旧ソ連の経済困難は軍備増強と国民生活の向上の両立を図ってきた従来の経済政策の継続をもはや不可能とした。1989年に，「社会主義国」と呼ばれる国々に大きな激動が起こった。即ち，東欧諸国では第二次世界大戦後40年以上に亘って続いた共産党独裁体制が軒並みに崩壊し，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリーなど政治的に複数政党制，経済的には市場経済制度の導入に踏み切った。その後，ついにソ連帝国も90年代に解体してしまったのである。

以上のように旧ソ連を中心とした社会主義経済体制の考察であり，旧ソ連の経済危機，及び旧ソ連国家体制の崩壊に至るまでの経過は，アメリカ，日本など先進資本主義諸国の高度繁栄と鮮明な対照となったのである。この結果は，マルクスの社会主義の経済理論を見直さなければならないのであろうか。そして人間と自然の物質代謝過程における人間の本来の労働について，その生産性を十分に発揮できるようにどのような社会体制が求められるのであろうか。

16)　ここの統計データの出所は注15と同じ。

4. 労働生産性の発揮に適合する経済形態は何か

前述のように，生物の物質代謝過程と人間の物質代謝過程において，さまざまな違いがあるけれども，生物は自らの生存発展のために，それぞれの自然法則に従いながら，自然に働きかけている。人間の社会で言えば，自然の法則はもちろん，更に客観的な経済法則，社会の経済基礎など要素に従いながら，人間の生存・発展に必要な使用価値を創造し，労働しなければならない。例えどんな社会経済形態においても，このような人間の労働本質を守らなければならない。このような人間の労働本質に適する社会形態こそ，より多くの労働者の生産上の積極性を発揮することができるのであり，人間の労働生産性も最大限に引き起こすことができると思われる。しかし，今日現実生活の中で，先進国の資本主義社会であれ，社会主義社会であれ，多かれ少なかれ人間の労働本質が守られてないことが良くあるのである。

特に旧ソ連のような社会主義を実践した国で，経済運営するには，経済の客観法則を無視し，政治的な要因で主観的に経済活動を行っていた。前述したように，旧ソ連は経済発展の行き詰まり，失敗，更に旧ソ連が崩壊するまでに陥ったのは，マルクスの社会主義理論の失敗ではなく，その統制経済の運営者の失敗であることをここで強調したいと思う。

もともとマルクスはその空想社会主義への批判の際に，社会主義の性質を明言したのである。つまり社会主義は超歴史的な人間理性の産物としてではなくて，人間社会の歴史発展における必然的な産物であると強調した同時に，資本主義の歴史的発展過程における社会主義を実現するための物質的な前提条件が揃わなければならないと。ここで，社会主義は超歴史的，人間理性的ではないということに，特に注目されよう。即ち資本主義の発展につれて，社会主義の生成する要因が不可欠である。旧ソ連，中国などの社会主義実践の国々は過去において，常に人為的，主観的な意志から社会主義を作ろうと思っていた。主観的な意志で社会主義を作ろうとしたの

で，自然の法則，客観の経済法則などに従わなかったのも当然である。これは旧ソ連，東欧など社会主義国の経済停滞の主な理由として考えられる。

実際には社会主義の計画経済と資本主義の市場経済の間に，絶対の優位，あるいは絶対の劣位ということは存在していない。社会主義計画経済の中に市場の要素が含まれていて，また資本主義市場経済においても計画の要素も含まれている。資本主義経済の市場性と社会主義経済の計画性は，一見すれば火と水の関係にあるように見えるが，実にこの両者は互いに補完的な関係にある。どの国でどれほど経済の市場化，どれほど経済の計画性を設定するか，その国の実際の客観的な経済条件で決まるわけである。資本主義経済発展史において，国家が経済への統制・関与によって経済の景気回復を達成した成功例はたびたびあるわけである。例えば，赤字財政による大規模な公共投資を行うという措置は非常に積極的な経済政策である。実際に資本主義の経済特徴について市場性のイメージが強いが，国家からの市場関与は不可欠であることもすでに証明されている。

特に社会主義の経済体系おいて，労働手段の基礎は公有制或いは国家所有制なので，経済全体としてマクロコントロールするには最適だと思われる。そこで，国家は客観的な経済状況に基づいて，有効的な経済計画，或いは経済への有効的な関与が期待される。資本主義社会において，労働手段の基礎は私有制なので，経済の全体として国家のマクロコントロールに対して適しにくいが，市場経済のもとで競争は常に盛んに行われている。その故に，経済の効率性が高い。したがって，社会主義の計画性及びその理念と資本主義の効率性をあわせば，より有効的な経済体制が期待される。これはまさに今日の改革・開放の政策を実施している中国型社会主義の基本理念である。

中国は1950年代以後，ソ連型モデルの社会主義の計画経済体制を導入してきた。この硬直化した社会主義的な計画管理において，中国はインド等と並んで，アジアにおける典型的な「ハイコストエコノミー」の国であり，その非効率性によって長期的に中国を悩ませてきた。中央計画最高指導者

は経済の客観的現実を無視して，恣意的に経済発展の計画を定め，その結果，経済建設にマイナスをもたらしたこともよくあるのである。例えば，毛沢東思想に基づく「大躍進」[17] はその典型的なものである。「大躍進」は1958年に「英国を追い越し，米国に追いつこう」，「繰り上げて共産主義社会に入ろう」という毛沢東を代表する指導部の主観主義により発動された運動である。これは現実離れした高い指標を定め，無計画で荒っぽい指揮，などが主な特徴となっている。当時の指導部は「鋼をカナメとする」というスローガンを打ち出し，1958年の粗鋼生産目標を，前年より倍増の1070万トンと定め，このとても達成不可能な目標を実現させるため，「全人民製鉄大運動」を引き起こし，全国で「土法煉鋼」（手作りの方法による製鋼）を強行させて莫大な浪費を招いた。

この例でみれば，旧ソ連，中国などの社会主義国は過去において，経済の不振，停滞はマルクスの社会主義の理論によってもたらされたのではなく，経済の指導者は自然の法則，客観的な経済の法則を無視し，恣意的に経済の計画を定めたからである。

そこで，1978年12月開催された中国共産党第11期中央委員会第３回全体会議[18] は中国の経済における改革・開放のスタートとなったのである。

この会議の最大の功績は，長期にわたる中国の政治を支配した，いわゆる「極左」路線を清算し，「階級闘争をカナメとする」という毛沢東のイデオロギー重視の路線から，「経済建設を中心とする」路線への転換を決定したことである。またこの会議は，「生産力の発展に適応できない生産関係，上部構造及び管理方式，行動方式，思想方式」[19] を改革し，経済管理体制における権力の過度の集中を是正するため，「権限を地方と企業に移譲し，

17) ここの「大躍進」は馬成三著『中国経済が分かる事典』（ダイヤモンド社1995年）の14ページを参照した。

18) ここの会議の内容は馬成三『中国経済が分かる事典』（ダイヤモンド社1995年）の72ページを参照した。

19) ここの出所は注18と同じ。

地方と企業の管理自主権を拡大する」[20] ことと，「世界各国との経済合作に積極的に参加し，世界の先進的技術と設備を採用する」[21] ことを提起している。これらの方針は，文化大革命が終わったばかりの中国において，実に画期的なもので，中国の改革・対外開放の出発点となったのである。

1980年代中国改革開放を実施して以来，今日まで中国経済は目覚ましい躍進を遂げており，アジアＮＩＥＳに続いて，世界経済の中でもっとも高い成長率を達成した国の一つになった。経済成長率から見ると，1978年から92年にかけて，実質ＧＮＰは年平均9.0％の成長を遂げ，実質工業生産額は年率10.8％のスピードで成長してきた。その結果，ＧＮＰは14年間で3.3倍，工業生産高は4.2倍にまで増大した。そして94年の以後の調整期をへて，再び高成長になり，1999年末まで，ＧＮＰの成長率は平均して，約８％を維持してきた。改革開放により，中国には巨大な発展のスペースが出現し，経済も急成長を続けている。こうしたことから，中国は直接国際投資が集中する地域となっており，また７年連続して，導入された外資の額が最も多い発展途上国となった。

結　　び

以上のように，生物の物質代謝過程及び人間の物質代謝過程から生物の自然に対する働き，及び人間の労働の様相を見てきた。生物の自然への働きと人間の労働は大きな違いがあるが，自らの生存・発展のためにそれぞれの自然法則にしたがって自然とかかわって行くことの本質は同じである。人間の労働はその本質，即ち自らの意志決定で行動する場合，その労働は労働者にとって楽しいし，生産性はもっとも高い。ある社会体制によって，人間のこのような労働の本質を変えれば，労働は労働者にとって苦痛になり，労働嫌悪になってしまう。このような状況では，人間の労働は消極的となり，労働の生産性も低い。

---

20)　ここの出所は注18と同じ。

21)　ここの出所は注18と同じ。

旧ソ連の崩壊，20世紀60年代中国経済の停滞および90年代中国経済の高成長はある側面からマルクスの経済理論の正確性を再び証明したのである。マルクスの描いた人間の労働の本質，即ち人間自身の生存発展のための使用価値の創造は人間労働の本質である。自然の法則，客観的な経済の法則にしたがって，人間の自然に対する物質代謝過程はスムーズに行うことができて，その時人間の労働生産性は最大限に発揮されよう。

〈主要参考文献〉

柳田義章『労働生産性の国際比較と商品貿易および海外直接投資』文真堂　1994年
マルクス『資本論』第一巻，向坂逸朗　訳，岩波書店　1967年
佐藤了，西塚泰美　編『物質代謝とその調節Ⅰ』岩波書店　1975年
内田義彦『資本論の世界』岩波新書　1966年
行沢健三『労働生産性の国際比較』創文社　1987年
藤本昭『中国：21世紀への軟着陸』日本貿易振興会編　1997年
馬成三『中国経済の国際化』サイマル出版会　1995年
呉敬漣『中国の市場経済』サイマル出版会　1995年
小林英夫『戦後日本資本主義と「東アジア経済圏」』御茶の水書房　1991年
渡辺利夫『社会主義市場経済の中国』講談社　1994年
中国国家統計局『94年中国発展報告』（中国語版）中国統計出版社　1994年
何練成『中国市場経済的所有制基礎及其実現』（中国語版）中国西北大学出版社　1993年
馬洪水『社会主義市場経済は何か』（中国語版）中国発展出版社　1994年
加藤寛『現代ソ連経済の構造』日本経済新聞社　1983年
馬成三『中国経済が分かる事典』ダイヤモンド社　1995年